❷ おふじさん

むかし、むかし、あったどよ。

おらが村に鎌沼っつう大きな沼があっただど。

そのあたり一面ヤブが生い茂りその処々に、大きなハンの木が空を覆い、昼でも薄暗いほどで、無気味な場所だっただど。

その辺一帯は、水がわいてじめじめしてでな、すこし下になると小堀になって外村の用水となっていたんだど。

この沼に恐ろしい「主」が住んでいたんだど。

毎年、六月頃になると、村の十五、六歳位の奇麗な娘をな、人身御供に差し出さないと「主」が大暴れして、村人はとても困っていたんだど。

泣きながら我が身を切る思いで、差し出していたんだど。